

淨土宗教判説の発達

大谷研精

教判とは仏教の種々なる部門の特質を明かにして、批判分類し、接牒配列する事を云うので、之れに依つて自宗が仏教中に於いて如何なる意義を有し、地位を占めぬかを示し、以つて自宗立教の元意を宣示するものである。

今淨土宗の教判は元祖が選法集に於いて、道綽・禪師の要衆集を引いて、聖淨二門判を一宗の教判として用いられてゐるが、然し淨土宗の教判は了慧が選法集大綱抄卷上に、

向淨土一宗、教判如何、答此有三種、一者焉師、難易二道、二者道綽、聖淨二門、三者宗家二藏二教也。各判一代、以為教相。三藏、雖殊、其意大同。

(淨金八卷)

と言ひ、聖因が二藏義記卽卷第一に、

阿闍一宗中、何故教相、耶答諸聖教義、不過教行證三、然則玄忠二道、是約行教相也、於修行儀有難易道、故西河二門、是約證教相也、於修證、證有聖淨、故一家二藏、是約教教相也、於弘道行證、有聲菩

故。 (淨全十二・三六三)

と言つてゐる採に、元祖以前既に支那に於いて曇鸞道綽及び呂遵の、所謂支那淨土三師に依つて論明されてゐる。之等支那淨土三師の教相は、教行證何れかの標準に従つて仏教を批判されるもので、其の本意は互いに相通するものである。

道綽の二門判は本来曇鸞の二道判に依つて立てられたものであるが、二道判も二門判もその危趣に於いては全く同じくするもので、元祖は此の旨を選択棄に、

其名虽異其危亦同 (淨全七卷)

と云われている。然し乍ら聖淨二門判は、時機相應論に立却して行の難易を論判し、末法に於いては聖道門の行證は至難であつて、淨土の一門こそ唯一の行法であるとし、一生造惡の凡夫救済の立場に於いて、その普適性を強調し、以つて二道判の主旨を一層明確にして居り、此の妄二門判がより進んだ教判として、その持贖を認められねばならない。此の事に就いて記主良忠は決疑抄が一に

所謂二門為篇目者聖道淨土各言親体義相觸發致私謂聖道淨土之名諸家共誰不可拒諱難易之言漸教虽詳頓教難免致以自他共許各言為今篇目難易二道本論文幽謂彼易行品但言不退不云往生是教語師或屈往生或屈別益 (淨全七・一九二)

と云つて二道判に対し二門判の勝義を三義を以つて論証してゐる。

呂遵の二教二教判に於いては、淨土教が菩薩藏頓教なる事を示したもので、此の事に於いて

は二道判二門判に見る争が出来ない獨特の意義を浄土教の中に宣示したもので、現過す争の出来ない重要性を持つてゐる。即ち二門判に於いては浄土教が末代阿丈救済の法として、その普遍性を明確にする争が出来たのであるが、二教判に見るが如き教法としての優勝性を顕示する迄には至らなかつたのである。然し台導の二藏二教判に依り、教法としての優勝性を示すに至り、二門判と二教判の關係に於いて、即ち浄土教の普遍性と同時に優勝性を明かす上に於いて一層発達せる教判の成立を期待出来たのである。

元祖が開宗に當り三師教相の中に特に道綽の二門判に依られたのは何故かと云うと、ガ一には當時相応の立場に立脚し、ガ二に末法の自覺の上より二門判を用いられたのである。此の理由を三祖記主は又疑抄ガ一に、

聖道浄土名目分明在安泉衆故教明文而引之耳導師釈中虽有義分無名目故不引之（浄全七・元一）

と云つてゐる所に、台導の著書の中には判然と聖道浄土の名目が出されてゐない事にも依るが、二藏二教判が浄土一衆を開創するに當つて教判として、不適當であつた事にも依るのである。

聖因は聖浄二門判の内面に含まれてゐる浄土門最勝の主旨を表面に取り出す事に依り、浄土教判を解明にし、且つ教判組織を大成するに至つた。聖因の教判は三師教相の中、台導の二藏二教の教判に依られたものであつて、

若依光明大師釈義立浄土衆應以二藏及興二教而提一代諸聖教（浄全十二・一六）
と述べて現至疏玄義分に明す二藏二教判を詳細に組織付せられたものである。即ち漸教に初分

と彼分とを分かち、頓教に性頓と相頓とを分かち、唯相頓教のみを以つて淨土門となし、相頓教は淨土門易行道にして、罪惡生死の凡夫も仏の本願力に蒙ずれば、淨土に往生し直ちに無生を證する事が出来る故に之を頓中頓と名づけ、末法今時に於ける時機相應の教は此の教に限る事を主唱されたのである。

聖賢の教判は淨土門の統攝的立場を明かされたもので、元祖の二門判の内面は包まれた教法としての優勝性を、教判として表面に描出し、更にその主旨を組織立て、二門判と二教判が表裏一体なる事を示し、二教判が淨土宗の教判として二門判と対照せられる事を示し、ひいては二門判が教判として全うする事を明かし、表裏一体の教判として此処にその確立を見たのである。

以上の如く淨土宗の教判説は支那淨土三師の教判を基盤として発達したのであるが、元祖の教判に於いては二門判を教判とされた結果、淨土宗の易行の法としての面が著しく表わされ、反面教法の深勝なる處が明瞭にされ得なかつたやうな面があつたが、聖賢に至るや遂に二藏二教の教判として大成されるに至り、淨土宗の教判として二門判と並んで組織的に確立されるに至つたのである。斯くして淨土宗の教判は元祖が選択集に

爲極惡最下之人而說極上最上之法 (淨全七・五〇)

と云われた如く、金仏教中に於いて易行最勝の法たる事を明かし、万機普益の一乘教として一切衆生と等しく救済し、且つ頓教として速かに得證せしむるものである。